

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320138

研究課題名（和文）韓国のポスト産業化に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study on Post-industrialized Society in South Korea

研究代表者

本田 洋（HONDA HIROSHI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：50262093

研究代表者の専門分野：社会人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：社会人類学，生活実践，移動，開発，産業化，韓国，共同体，帰農

1. 研究計画の概要

本研究は、1990年代以降の韓国社会の変化、なかでも社会の様々な部門で顕在化しつつある諸個人や諸主体による創造的な生活と開発の実践を、産業化に伴う社会・文化の構造的変化によって条件付けられつつも、それを再編成しようとする新たな社会・文化構築の可能性を含みうるものとして対象化する。そしてその実態を社会人類学的な観点から把握するとともに、この「ポスト産業化」といえるような状況を、産業化過程での変化とあわせて統合的に捉える視座を模索しようとするものである。

2. 研究の進捗状況

(1) 産業化過程とポスト産業化状況における生活と開発の実践に関する民族誌的ならびに理論的検討として、特に以下の3点に着目した研究を進めた。

生計と生活の拠点を移す移住、ならびに複数の生計・生活拠点の往来等、人々が移動をすることの目的の一つとして、生計と生活の営みに活用しようとする多様な諸資源へのアクセスを確保することを想定できる。近現代の激しい政治経済的変動のなかで、韓国の地方社会に暮らしてきた人たちが、このような生活の諸資源へのアクセスを目的とする移動をどのように展開してきたのかについて、民族誌的資料と人口動態の諸統計（特に植民地朝鮮と解放・独立後の韓国で実施されたセンサス資料）を対照分析することを通じて実証的に検討した。

政府の主導により、資本と資源を特定の産業分野に集中的に投下することによって実現された「圧縮型」経済成長の過程で、そこ

から疎外されつつもそれとの関連で展開してきた大都市周縁地域における木工団地の形成や地方における手工業拠点の形成、その他、地方行政体の施策と地域住民の自助努力に強く依存する地域・観光開発の実践について、主として現地調査を通じた資料収集に基づいた民族誌的な研究を行うとともに、理論的な検討を行った結果として、資源構築の流動性の高さや産業集積の度合いの低さをその特徴として指摘することができた。

(2) ポスト産業化状況における移動と生活・開発実践についての事例研究として、南原地域の帰農者と帰農運動に関する現地調査と資料収集を進めた。この事例では、都市居住者による「帰農」行為、すなわち生態環境との親和性を追求する地方農村への移住と生活拠点の形成の個々の実践と、この帰農を一つの目標に掲げつつも、そのみに留まらない代案的な生活運動の展開のそれぞれについての実態調査と、両者の関係についての考察を進めた。

(3) ポスト産業化状況における開発と生活の実践について、(2)の他にも、大都市居住既婚女性、済州島農村住民と済州島系巫俗職能者、淳昌地域農村住民を対象とした現地調査を進めた。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

韓国の産業化過程での生活と開発の実践についての理論的研究が、当初の計画以上の進展を見せている。日本や他の東アジア社会

